

急性腹症の X 線診断

長 洲 光太郎 元関東通信病院外科部長
日 野 貞 雄 元胃腸病院副院長・内科 著
平 松 慶 博 帝京大学助教授・放射線科

慶応義塾大学教授

西 岡 清 春

本書は高名老練な外科医の長洲光太郎博士と内科医の日野貞雄博士に新進気鋭の放射線科医の平松慶博博士を加えて、3人が見事なコントラストとチームワークでつくりあげた著書である。

常々、私は医師が患者と対面するとき系統的記述の本による知識がいかに無力であるかを痛感する者であるが、本書は従来の著書とは趣を異にしており、患者と対面してからスタートする診断のすべてが、膨大な知識と経験を背景に生きた形で具体的に平易に述べられており、著者の一見何でもないような発言のもつ意味を十分に汲みとる時、初めて心からの共感とすばらしさを感じる本である。

急性腹症の概念は現在はっきりしたものではなく、人によって混乱しているが、元来この名称は、緊急な手術を決断する必要がある腹部急性疾患で、十分な検査を施行して診断をつける時間的余裕のない状態を対象として生れた集合名称である。

長洲先生は急性腹症の定義、緊急手術にいたる心構え、必要な検査、診断の心構えについて述べられているが、わずか6ページの内容に急性腹症のみならず、すべての診療に対するすばらしい倫理(患者への愛情)が含まれており、医学概論のひとつとして、特に若い医学徒に読んでいただきたいと思う。

日野先生は、問診、全身所見、腹部所見、臨床検査について長年の貴重な経験と学識をもとにして簡潔な記述と表による鑑別診断について述べている。

本書の主題であるX線診断について、X線検査の項は放射線学会の誇る気鋭の平松慶博君が正確に具体的に最新の知識をまとめており、考え方について少しのあいまいさもない歯切れのよさを示している。

X線診断の各論は、症例について3人がフリーの立場で討論した内容が平易に示されており、患者と対面した時からの診断のすすめ方が一言一句に示されている。

急性腹症の診断におけるX線検査の重要性については誰もがよく認識していることであり、わずか1枚か2枚の写真からどれだけ多くの生きた情報を引き出しうかに患者の生命がかかっていることが多い。本症におけるX線診断はただ単なるX線診断ではなく、時々刻々急変する病態に対する最も効果的な治療方針の決定に直結するものでなければならない。本書はきわめてバラエティに富んだ症例を使って、実に読みやすく書かれているためにスイスイと読んでしまったが、著者の真意を汲みとれなかったのではないかと恐れるものである。

最後に病とたたかいながら最後まで平然と医師の務めと学者としての執筆に努力された長洲、日野両先生のご冥福を心からお祈りする次第である。

(医学書院刊・B5・頁240・図108
写真161 ¥7,500 丁200)